

令和六年度

国

語

注

意

- 1 問題は1ページから5ページまであり、これとは別に解答用紙が1枚ある。
- 2 解答は、全て別紙解答用紙の該当欄に書き入れること。

(一) 次の文章を読んで、1～8の問いに答えなさい。(1)～(9)は、それぞれ段落を示す番号である。

① 枯山水庭園^{（注1）}において、縁側に人々が座り込み、ぼーっとその庭をながめている様子はよく見られる。縁側とは、文字通りに建築の縁であり、そこは建築と庭の境界と言える。以前から私は、人はそこで何に目を向け、何を考えているのか、という疑問を持っていた。龍安寺石庭など最たるものであるが、白砂の上に配置された十五個の石からなるその庭は、それ自体が謎である。その石組は「虎の子渡し」と説明されるほか、多くの解釈がこれまでなされてきたが、この庭は、一意的に解釈が定められるものではない。A、そのような多数の解釈を生み出しうるほど汲み尽くせない深み、絶妙な構成を有していることにこそ注目すべきだろう。

② ところで、現代語の「ながめる」は古語の「ながむ」に相当するが、ながむとは不思議な言葉である。ながむの「なが」は「長い」から来ているらしく、文字通りに「長目」を語源とする説もある。今日ながめるというと、ある風景に漠然と長時間かけて目を向けることを指し、そこにぼんやりと物思いにふけるという意味が加わることもある。古語のながむは、これと同様の意味を持つが、もう一つ、詩歌を詠むこと、声を長引かせて詩歌を吟じることとも言った。和歌などではしばしば「ながめ」が「長雨」と掛詞^{（注2）}にされる。「ながめる」について考究してゆく中で参考になったのは、臨床心理学者上田琢哉^{（注3）}氏の研究である。上田氏は、臨床心理学の立場から、ある対象を集中的に分析してゆく「見る」意識に対して、対象を分析しないまま漫然と全体的に捉える「ながめる」意識の積極性を説いている。このことを、上田氏は、箱庭療法^{（注4）}の事例から導き出しており、「ながめる」について以下のように述べる。

それは「分離し、はつきりさせる」という意識態度ではないが、精神科の診断レベルでいう混濁やもうろう状態などとはまったく異なるものである。むしろ、ある面ではぼんやりした状態とクリアな状態を同時に保持しているような不思議な状態と言えよう。

③ 縁側でぼんやりと庭をながめること。それは、目の前の風景に目を向けてはいるが、分析的・集中的に「見る」のではなく、その全体を漫然と捉えており、かつ、同時にほかのことに考えをめぐらし、詩歌などに昇華されることもある。それは、その場でなくともできそうにも思えるが、しかし、その風景に目を向けていないと起き得ないことである。右に記されているように、「ながめる」とは不思議な二重の状態である。

④ 上田氏は、この「ながめる」を宮本武蔵が『五輪書』で述べている「観の目」——それは、遠いものを近くに見、近いものを遠くに見るという——に接続するなど、刺激的な論を展開しており、その中で日本文化の各所に見られる石を取り上げ、龍安寺石庭にも触れている。そして、庭園の石とは、「意味を問わないでくれ」という不思議なシンボル^{（注5）}だとし、龍安寺石庭について次のように述べている。

私たちはお金を払って無自性の背景にある存在感を感じに行っているのである。そして、無自性の背景にある存在感は、意味分節的に「見」てはわからない。ただ座って「ながめ」るほかないのである。わが国の庭において石が主役であることは間違いないが、その石は、配置を象徴的に解釈したり芸術性を云々するより、「黙ってながめる」ためのものと考えた方がわかりやすいのではないだろうか。

⑤ 龍安寺石庭において人が、ただ座って「ながめ」るほかない要因は様々な考えられるが、一つには、そこが非整形形式、非遠近法的な構成を有しているからではないだろうか。ヴェルサイユ庭園のような西洋の整形形式庭園は、遠近法によって構成されており、その消失点こそ、王者、具体的にはルイ十四世による至高の視点になる。もちろん、それ以外の場所からも人はその庭園に目を向けることはできるが、庭園全体は、その至高の視点を念頭に置いて構成されている。整形形式庭園とは「見る」ための庭と言うことができるかもしれない。

⑥ 対して、日本庭園のような非整形形式、非遠近法的な空間においては、そのような至高の視点はない。もちろん、寝殿造庭園であれば、寝殿が最高位の視点であるし、池泉回遊式庭園であっても、視界の良い地点はいくつかあるが、かと言って、そこからの視点は念頭に置いて全ての要素が構成されているわけではない。程度の差こそあれ、そこから見えるのは庭園の一部である。⑦ 龍安寺石庭は、どの位置から目を向けても、十五個の石全てを視界に入れることはできないとされる。そのことは、この庭が一意的に解釈できないことと通底しているように思われる。白砂のエリアが長方形という整形形式であるために、その庭園に対する縁側の中央こそが至高の視点であるように感じられるが、そこに立ったとき十五の石全てを視界に収めることはできない。しかも、その一つの石を集中的に見ても、自然石があるだけである。

⑧ 人が海や山の風景を「ながめる」のは、それが「見る」ことが難しいからではないだろうか。眺望が開けていけばいるほど多くの対象を視野に収めることができるが、その一つ一つの要素、例えば、海であれば波、山であれば木を集中的に「見る」ことはもはやできない。ただ、全体を漫然と視野に入れることしかできない。その現象の縮小版が、庭園においても生じる。

⑨ このように、日本庭園とは、そこを訪れた人に、「見る」のではなく、「ながめる」ことを促すような空間構成がなされていると考えられる。

(原 瑠璃彦『日本庭園をめぐる デジタル・アーカイヴの可能性』による。)

(注1) 枯山水庭園 II 水を用いず、石組や砂によって自然の風景を表現した庭園。
 (注2) 箱庭療法 II 心理療法の一つ。(注3) 昇華 II 物事がさらに高次の状態へ高められること。
 (注4) 宮本武蔵 II 江戸時代初期の剣術家。(注5) 無自性 II それ自体に決まった本質がないこと。

1 [1]段落の——線①「縁側」と同じように重箱読みをする熟語を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

- ア 傾斜 **イ** 本棚 ウ 毛玉 エ 場所

2 [1]段落の [A] に当てはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。
 ア とろろが イ なぜなら **ウ** むしろ エ または

3 [2]段落の——線②「しばしば」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

- (1) 「しばしば」が修飾している一文節として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。
 ア 「ながめ」が イ 「長雨」と ウ 掛詞に **エ** される

(2) 「しばしば」の品詞名として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

- ア** 副詞 イ 連体詞 ウ 形容詞 エ 感動詞

4 [3]段落の——線③「ながめる」とは不思議な二重の状態である。」とあるが、「二重の状態」について、本文の趣旨に添って説明した次の文章の [a]、[b] に当てはまる適当な言葉を書け。ただし、[a] は、[2] (引用部分を含む)・[3]段落の文中の言葉を使って、二十五字以上三十五字以内で書くこと。また、[b] は、最も適当な言葉を、[2] (引用部分を含む)・[3]段落の文中から二十六字でそのまま抜き出し、その最初と最後のそれぞれ三字を書くこと。 **a・b**、**解答欄参照**

庭をながめることは、[a] ということである。このように、「ながめる」ときは二つのことを並行して行っており、そのときの意識は、[b] 状態にある。

5 [4]段落の——線④「庭園の石とは、『意味を問わないでくれ』という不思議なシンボルだ」とあるが、ここでの「石の意味を問う」とは、どうすることを言っているのか。最も適当な言葉を、[4]段落 (引用部分を含む) の文中から二十字でそのまま抜き出して書け。 **解答欄参照**

6 [5]・[6]段落に述べられている、西洋と日本における庭園の空間構成の違いについてまとめた次の表の [a]、[b]、[c] に当てはまる最も適当な言葉を、[5]・[6]段落の文中から、[a]、[c] は五字で、[b] は五字以上八字以内で、それぞれそのまま抜き出して書け。

西洋	日本
西洋の整形形式庭園は、遠近法によって構成され、庭園全体が [a] を意識して作られていることから、[b] と言うことができる。 a. 至高の視点 b. 「見る」ための庭	日本庭園は、非整形形式、非遠近法的な構成で作られ、[a] が想定されておらず、最高位の視点や視界の良い地点であっても [c] しか見えない。 c. 庭園の一部

7 [5]段落の——線⑤「龍安寺石庭において人が、ただ座って『ながめ』るほかない要因は様々に考えられる」とあるが、非整形形式、非遠近法的な構成を有する龍安寺石庭において、人が、「ながめる」ほかない理由を、龍安寺石庭の石の配置の具体的な特徴に触れながら、[7]・[8]段落の文中の言葉を使って、四十文字以上五十文字以内で書け。 **解答欄参照**

8 本文に述べられていることと最もよく合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書け。

- ア 日本人に古くから備わっている「ながめる」意識は、庭園の西洋化によって薄れつつある。
 イ 古語の「ながむ」の意味が、日本庭園の空間構成を決定づける中心的な要因となっている。
 ウ 「見る」と「ながめる」の違いは、西洋の文化に対する日本の文化の優位性を示している。
エ 人に「ながめる」ことを促す日本庭園は、庭の一意的な解釈が不可能な構成になっている。

(二) 次の文章は、女子全国高校駅伝(通称「都大路」)に出場するチームの補欠だった「坂東(私)」が、「ココミ」先輩の欠場で、大会前日に一年生ながら急遽アンカーを任されることが決まり、当日、中継所に向かう場面から始まっている。これを読んで、1〜5の問いに答えなさい。

本当に私、走るんだ——。
スタジアムからこの中継所までの連絡バスに乗っている間も、雪とともに流れていく京都の街並みを眺めながら、いつそのまま家の前まで走って帰ってくれないかな、と内心、真面目に願っていた私である。

バスから降りたのち、待機所になっている病院のロビーでは、はじめて留学生のランナーを見た。彼女のことは陸上競技雑誌で見かけたことがあった。私や咲桜莉が得意とする中距離走の高校記録を持つ超有名選手だった。驚いたのは、彼女が自分よりもずっと身長が低かったことだ。緊張のしすぎで、身体をどこかに置き去りにしてしまったような私に対し、留学生の彼女は同じデザインの本チコートを着た女の子二人と談笑していた。サポーター要員として、中継所まで部員が駆けつけているのだ。呼び出しの寸前まで、留学生は足のマツサージを受けていた。ひとりやることもなく、キャラメルをなめていた私とはエラい違いだった。

第二集団のトップを切って、その留学生選手がタスキを受けて出発する。
「すごい。」思わず声が漏れてしまうほど、今まで見たことがない走りのフォームだった。周りの選手たちもハッとした表情で彼女の後ろ姿を目で追っていた。走る際の、足のモーションがまるで違った。走るためのマシーンと化した下半身に、全くぶれない上半身がくっついていて、まるで跳ねるように地面を蹴る、その歩幅の広さとい、それを支える筋肉のしなやかさとい、何て楽しそうに走るんだろう、とほれぼれしてしまうフォームで、彼女はあつという間に走り去っていった。

彼女の残像を思い浮かべながら、視線を中継所に戻したとき、
「私は好きだよ、サカトウーの走り方。大きくて、楽しそうな感じがして。」

緊張のしすぎで、全くごはんを食べる気が起きない朝食会場で、正面に座る咲桜莉に突然告げられた言葉が耳の奥で蘇った。そんなことを彼女から言われたのははじめてだった。私は咲桜莉の機敏で跳ねるような足の運び方や、テンポのよい腕の振り方が、自分にはできない動きでうらやましく、自分の走り方は大雑把で無駄が多いと思っていたから、驚くとともに純粋にうれしかった。おかげで用意された朝食を全部平らげることができた。

私が留学生の彼女を見て楽しそうと感じたように、咲桜莉が私の走りを見て楽しそうと感じてくれている——。
留学生の彼女と私じゃレベルが全く違うけれど、不思議なくらい勇気が太ももに、ふくらはぎに、足裏に宿ったように感じた。気づくと、あれほど我が物顔でのさばっていた緊張の気配が身体から消え去っている。

そうだ、私も楽しまない——。
こんな大舞台、二度と経験できないかもしれない。もちろん、来年だつてここに戻ってきたけれど、私が走れる保証はどこにもないのだ。ならば、この瞬間をじっくりと楽しみたい。最初で最後のつもりで、都大路を味わわないとつまらないぞ、サカトウー。

ずうずうしい気持ちがいじわりと盛り上がってくると同時に、走る前の心構えが整ってきた。さらには、周囲の様子もよく見えてきた。もともとそれは、半分の選手がすでにゼッケン番号を呼ばれ、待機組の人数が減ったせいかもしれないけれど。

② 早く、走りたい——。

身体がうずいて、その場で二度、三度とジャンプして、ステップを踏んだ。

すでに先頭が通過してから、五分以上が経過しただろう。ついに、私の番号が呼ばれた。順位に関しては、良いとは言えない。でも、それは菱先生も事前に予想済みのことだった。というのも、各都道府県で行われた予選大会にて、五人のランナーは本番と同じ距離を走る。コースのつくりや、当日の天候の違いによる影響は多少あるだろうが、都大路に③を進めた各校のタイムは全て公開されるので、その記録をチェックしたら、おのずと全体における自校のたいの位置がわかる。私たちの学校の記録は四十七校中三十六位だった。

「全員がはじめての都大路で、いきなりいい成績なんて出ないから。今回はまずは二十位台を目指そう。」

と菱先生はハッパをかけたが、この場に残っているのは十五人くらい。すでに三十位台にいることは間違いなさそうだ。

中継線に並んでいた選手が四人、目の前で次々とタスキを受け取り、一目散に駆け出ししていく。本チコートを脱ぎ、青いキャップをかぶった係員に手渡し、中継線まで進んだ。

私とほぼ同じタイミングで、すぐ隣に赤いユニフォームの選手が立つ。私よりも五センチくらい背が高い。寒さのせいとか、緊張のせいとか、血の気のない真っ白な肌に、唇だけが鮮やかな赤色を残していた。ぱつぱつと一直線にそろえられた前髪と重なるように、きりりと引かれた眉の下

から、切れ長な目が見下ろしている。

互いの口から吐き出される白い息を貫き、視線が交わった瞬間——、彼女の目Aと、私の目Bを結び、直線ABの中間点Cにて、何かが「バチンツ」と音を立てて弾けるのを聞いた気がした。相手は目をそらさなかった。私も目をそらさなかった。

拡声器を手に係員のおじさんが隣を通ったのを合図にしたように、二人して同じタイミングでコースに向き直った。体格を見ても、面構えを見ても、相手は一年生ではなさそうだった。

でも、何年生であつても、この人には負けたくない——。

むらむらと闘争心が湧き上がってくるのを感じた。そう言えば、「どうして、私なんですか。」と昨夜、菱先生の部屋で泣きべそをかく寸前の態で選考の理由をたずねたとき、

「駅伝はみんなで戦うもの。でも、いちばんしんどいときは、誰だつてひとりで戦わなくちゃいけない。そこでどれだけ戦えるかは、持ちタイムでは測れない。じゃあ、ひとりで粘り強く戦えるのは一年生で誰かつてなつたとき、キャプテンもコミも真つ先に挙げたのが、坂東——、アంతの名前だつた。」

と告げてから、「鉄のヒシコ」は「私もそう思った。だから、死ぬ気で走つてきな。」と完全に目が据わった表情でニヤリと笑つた。

菱先生は勝負師ゾーンに入つてしまった感じで怖すぎるし、二人の先輩が推してくれたことも、それつて買いかぶり以外の何物でもない、と今でも思うが、雪が舞う視界の先に自分と同じ黄緑色のユニフォームが見えた途端、全てが頭の中から吹っ飛んだ。

「美莉センパイ、ラスト！ ファイトですッ。」
目いっぱいいの声とともに、私は両手を大きく頭上で振つた。

(万城目 学『十二月の都大路上下ル』による。)

(注1) 咲桜莉＝坂東の友人で、同じ陸上部の一年生。 (注2) 菱先生＝陸上部の顧問。

1. — 線③「 を進めた」が、「次の段階に進んだ」という意味の言葉になるように、 に当てはまる最も適当な言葉を、次のア、イ、エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 藤 イ 話 ウ 席 エ 駒

2. — 線①「はじめて留学生のランナーを見た。」とあるが、出番を待つ留学生ランナーを見ている坂東について説明したものとして最も適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 留学生を見て逃げ出した気持ちに拍車がかかり、周囲の状況が見えずに慌てふためいている。

イ 不安と緊張で走る準備が整わない自分と、準備が整い余裕がある留学生の差を思い知っている。

ウ 超有名選手である留学生と同じ区間を走る自分が場違いに思えて、現実を直視できないでいる。

エ 高校記録を持つ留学生の存在に圧倒されて、彼女を遠い存在として憧れの目で見つめている。

3. — 線②「早く、走りたい——。」とあるが、坂東がこのような気持ちに至つた経緯について説明した次の文章のa、b、cに当てはまる適当な言葉を書け。ただし、aは、最も適当な言葉を、文中から二十四字でそのまま抜き出し、その最初と最後のそれぞれ三字を書き、bは、最も適当な言葉を、文中から二字でそのまま抜き出して書くこと。また、cは、文中の言葉を使って、三十字以上四十字以内で書くこと。a、b、c 解答欄参照

坂東は、走ることに消極的な状態のまま中継所に到着したが、走り去る留学生のほればれするよ
うなフォームを見て、a ことに思いが至り、b が湧いてきた。そして、c という、
今の状況を肯定的に捉えた開き直りとも取れる大胆な気持ち徐徐に高まり、身体がうずくほど
走りたい気持ちになった。

4. — 線④「この人には負けたくない——。」とあるが、文中には、坂東が隣の選手を負けたくない相手として初めて意識したときの様子が、比喩を使って表現されている一文がある。その一文として最も適当な一文を、文中から抜き出し、その最初の五字を書け。互いの口か

5. 本文から読み取れる坂東の人物像について説明したものとして最も適当なものを、次のア、エの中から一つ選び、その記号を書け。

ア 先生やチームメイトからの期待が走る原動力となつていたことから、自分が嫌で納得できないこ
とでも、誰かのためならひたむきになれる人物であることがわかる。

イ 自分をその気にさせるための周囲の言葉を真に受けてしまったことから、周りの人間の影響を受
けやすく、簡単に口車に乗せられてしまう人物であることがわかる。

ウ 走る重圧や弱い気持ちチームメイトとの関わりを通して消え去つたことから、周囲の存在や言
葉を前向きに捉え、自分の力に変えられる人物であることがわかる。

エ 先輩と先生が下した決定を断り切れずに走る羽目になつてしまったことから、自分の思いを相手
にはつきり伝えられず、後悔してばかりの人物であることがわかる。

- (三) 次の1〜4の各文の——線の部分の読み方を平仮名で書きなさい。
- 拍手喝采を浴びる。**かささい**
 - 証拠の有無を詮索する。**せんさく**
 - 品物を安く卸す。**おろ**
 - 僅かな変化に気づく。**わず**

- (四) 次の1〜4の各文の——線の部分を漢字で書きなさい。ただし、必要なものには送り仮名を付けること。

- 今年度のそんえきを計算する。**損益**
- 外国に行くためにりよけんを取得する。**旅券**
- 世話がやける。**焼ける**
- 時をきざむ。**刻む**

- (五) 次の文章を読んで、1・2の問いに答えなさい。

野州糞崎郷(注1)のうづらは鳴くことなし。その隣郷は音を立つることよし(注3)。土老の言へる、いつの頃にや、糞崎何某(注2)といへる人、その地を領し、うづらを好みてあまた飼ひ置き、金銀をちりばめし籠に入れて寵愛せしが、ある時、かのうづらに向かひて、鳥類にても汝はしあはせなるものなり。金銀をちりばめし籠に入れて心を尽くして飼ひ置くは、うれしかるべきことなりとたはぶれしに、その夜の夢にうづら来たりて、「いかなればかく心得たまふや。金銀をちりばめし牢(注4)を作りて御身を入れ置かば、心よきことなるべきや。」と言ふと見て、夢さめぬ。糞崎何某、感心改節して、うづらを愛することを思ひ止まり、飼ひ置きける鳥を残らず籠を出し、「汝必ず音を立つることあるべからず。音を立てば、また捕られん。」と教化して放しけるが、それよりこの一郷のうづらは、音を立てざると語りし由(注5)。〔耳囊(注5)〕による。)

- (注1) 野州糞崎郷 今の栃木県足利市付近。 (注2) うづら 鳥の種類。うづら。
 (注3) 土老 土老 土地に住む老人。 (注4) 寵愛 特に大切にしてください。 (注5) 牢 罪人を閉じ込めておく所。

1 線①「たはぶれしに」について、次の(1)、(2)の問いに答えよ。

- 「たはぶれしに」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。**たわぶれしに**
- 「たはぶれしに」は、「おどけて言ったところ」という意味であるが、糞崎何某はどのようなことを言ったのか。糞崎何某が言った言葉を文中からそのまま抜き出し、その最初と最後のそれぞれ三字を書け。**(最初)鳥類に (最後)となり**

2 次の会話は、この文章を読んだ里奈さんと拓也さんが、夢からさめた後の糞崎何某の行動について話し合った内容の一部である。会話中の [a]、[b]、[c] に当てはまる適当な言葉を書け。ただし、[a] は、最も適当な言葉を文中から五字でそのまま抜き出して書くこと。また、[b] は七字以上十字以内、[c] は十五字以上二十五字以内の現代語で書くこと。

里奈さん 「糞崎何某は、夢を見たことをきっかけにして変わったよね。」

拓也さん 「そうだね。糞崎何某の夢に出てきたうづらは、『金銀をちりばめし籠』を『牢』にたとえて、あなた自身がそのような場所に置かれたら、それは、『a』であるはずがないと言っていたね。」 **a. いよきこと**

里奈さん 「糞崎何某は、そのうづらの言葉を聞き、うづらの気持ちになって考えてみて、[b]

拓也さん 「野州糞崎郷のうづらが、隣郷のうづらと違って鳴かないのは、糞崎何某が [c] と書きの、『c』という教えに由来していると土老は言っているよ。」

c. 鳴くとまた捕まるので、決して鳴いてはいけない

